左には非ず。されたる葉の事也。詩意も格別に面白く聞え候。扨露骨露臺等の露の字も皆解たり。暴は日にてさらすこと、露は夜氣雨露等にてさらすこと也。此儀白石・鳩巣兩先生も甚感稱して、空露葉なども唯つゆの葉と云事と存知候旨被申候由。扨ちごすゝき・しま萱艸等の類は、萩生の時よりしまをなし候。此文字猶未見當候。白石云。間道の字をしまの事に用ふ。織物の類しまの模樣は間道也。かんだうの切を、廣東の文字用るは非也。間道なるよし。桃溪又云。尺八を吹くこもそうは高麗僧なるべし。源氏に高麗人(こうらい)とあり。俗間にこま物屋・こまさらへなど云も、定て高麗物屋・高麗さらへにて可有之と。白石聞て一噱せりとぞ。

一、白石、伊藤仁齋の學を評す

恭靖先生在世の內、京師伊藤源佐、異學を唱へて好學を誘奬し、程朱の學を誹議し、甚敷しくは大學・中庸聖人の書にあらずといふ事を書に筆し、公然として無所忌憚。みづから仁齋と稱して天下を皷動す。恭靖門徒相集て此事を嘆恨す。白石謂。仁齋は宜稱不仁齋。公然として異論を建立し、天下の人の賢人・君子と稱する人をも蔑如する事、古人を以て比倫せば荀卿が喜爲異說而不讓。敢爲高論而不顧の弊よりして李斯が如きの甚敷者出て、夫子の六經を焚き、三代の諸侯を滅し、終には其尙ぶ所の秦も二世にして滅候。此東坡が議論、先賢未及所を發明せり。一念の不仁より起りて、禍患施て萬世に傳ふ。然ば不仁齋と云べきものか。恭靖云。宋代眞儒輩出といへ共、王荆公が如きもの出で、世に所謂賢人・君子其禍を得ること其慘たり。或時邵康節へ門弟相集て世の中を嘆きて、此世の中如何成行可申かと問けるに、返答はなく其座を起て奥へ入被申候。其時晉書の內を一卷取て投て入被申候。生客其篇を看れば安帝記也とあり。南宋に移り其後を考見るに、實に晉の衰亂と符合せりと云事を物語あり。白石云、邵子の學、誠に數を以、前知いたされたるものに候へ共、某を以觀申候に、晉は虛淸を崇尙し禮儀を蔑如せしより滅亡いたし候。宋儒道理の精微を窮め、道學再び明らか也といへども、其間虛誕の說なきにしもあるまじ。依之王氏の學行はれて、終に二帝北狩の禍亂に及びぬ。然ば數を以申にも不及候。晉の虛談と相符合する道理を以推し候へば相似申事也と云。恭

靖驚きて、宋儒を虛誕と比擬有之事は扨々と被申候。近世吾儒本朝に發興するも、漸く五六十年以來也。其以前は理學道體の沙汰には不及候。文章とても拙き事に候處、纔二三十年の內に仁齋が如き者出て文藝に達し、かゝる異論を唱ふる事誠に奇怪の儀也。其不仁の禍、後世如何樣の事可有之や難測知候。荒川景元、其徒の傑出にして先づ紀州に仕官しぬ。其餘紀藩へ事るもの猶其人ありて、今の上樣にも其學術を御聽受有之候よし。

一、方公孺の梅所記と鳩巣の愛梅說

方公孺が集に梅所記あり。梅を不植して梅を好む。依之梅所と號せる者ありて其事を記す。鳩巣の作れる愛梅說、實に異域同談と云べし。

一、狩野探幽賞翫の茶入

狩野探幽數百金を棄てゝ、求得たる茶入あり。鍾愛する事甚し。茶湯を數寄といへども、唯此茶器ひとつを以て茶を點ず。然るに明曆三年酉の歲災火探幽が宅も燒たり。其時分其茶器を箱ながら己が首にかけて火を避たり。炎焰甚熾にして僅に身を以て脫れぬ。其時茶器を失うて後は、心に愜ふ器もなく欝々として暮しぬ。年經て後禁裏御修覆、御繪可調旨にて京師へ赴く。或時諸司代板倉周防守殿へ呼るゝに付罷出候。防州對面あつて、むかし咄の次手に、彼茶入は火事にて紛失のよし如何と被尋候處、扨々わすれて罷在候物を、よしなき儀を御尋被成候て、迷惑仕候旨申候。某も其茶入にて茶湯に逢申候故、別て存出し候。其方秘藏無比類事聞及候故尋候と、重て被申聞候へば、必被仰出候儀も御止可被下候。心底を取亂し候よし申候。其時防州小姓を呼て、彼茶入持きたれとあり。則茶器を持參せり。防州手に取て熟視し、世には似たる物もあるものかな。彼茶入某唯一度見申候故、無覺束事ながら近頃能似たる物故、唯今みせ申よし被申被相渡候所、探幽手に取て大に驚き、是は其茶入にて候。是は〳〵とて其儘絕入申候。侍者大に騷ぎて水などそゝぎ、漸にして氣息いで再び其器を見て、彌眞の私茶入にて候。不思議千萬成事に候。世の中に可有之ものにて無之候と云。防州被申候は、扨は某が目も不惡候。此度道具屋持參、不慮に其茶器と心付候よりして、其方へ遣し度求置候。則唯今贈候旨御申候て探幽に賜之。此